

モモの超弱せん定による早期多収(4年成木化)

[要約]

モモを幼木から超弱せん定を行うと、樹冠面積の拡大が慣行せん定樹より1～2年早く、植え付け2年目から収穫が可能となり、収量も慣行せん定区より1～2年早く増加する傾向を示し、早期成園化、早期多収が期待できる。

研究室名	果樹研究室	連絡先	0869-55-0276
------	-------	-----	--------------

[背景・ねらい]

県下では、基幹品種である‘清水白桃’を中心としてモモの超弱せん定栽培(大藤式)が現地で広がりつつある。その特性として、苗木の植え付け後、多発する徒長枝のほとんどを骨格枝として利用するため、樹冠の拡大が早く、若木時代から多収となることが栽培者や指導者によって指摘されている。そこで、超弱せん定樹の多収性を確認するとともに、その特徴を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 超弱せん定樹は冬季に内向した大きな徒長枝や重なり合いが著しい側枝のみを除去する程度にせん定した。
2. 超弱せん定樹の樹冠面積は3年生で20㎡を超え、以降は拡大がやや緩慢になり、5年生で30㎡程度となった。なお、慣行せん定樹は6年生で30㎡程度となった。両者の樹冠拡大の違いは3年生樹で最も大きく、超弱せん定樹は慣行せん定樹の3倍程度であった(図1)。
3. 収量は超弱せん定樹では2年生樹で5kg/樹程度、3年生樹で33kg/樹程度、4年生樹では100kg/樹以上となり、5年間の積算収量で慣行せん定樹の約4倍となった(図2)。
4. 生理的落果率は、2年間の調査では超弱せん定樹と慣行せん定樹との間に明確な差は認められなかった(図3)。
5. 果実の肥大は超弱せん定樹で300g程度、慣行せん定樹で310g程度に肥大した(表1)。
6. 糖度は両者に大差が認められなかった(表1)。
7. 核割れ率は超弱せん定樹の方がやや低かった(表1)。

以上の結果、超弱せん定樹は慣行せん定樹より樹冠の拡大が1～2年早く、早期多収が図れることが明らかとなった。また、核割れ率が低く、果実の大きさも300g程度と大きく、生産が安定すると思われる。

[成果の活用面・留意点]

1. ‘清水白桃’以外の品種については未検討である。
2. 成木期あるいは老木期の生育・果実品質を継続検討する必要がある。
3. 摘蕾作業に要する時間は5年生樹(約30㎡)で約8時間/樹を要し、慣行せん定樹の4倍程度の時間が必要である。

[具体的データ]

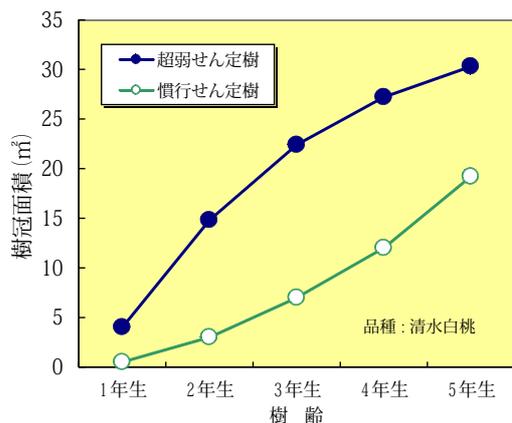


図1 超弱せんだ樹と慣行せんだ樹の樹冠面積の年次変化

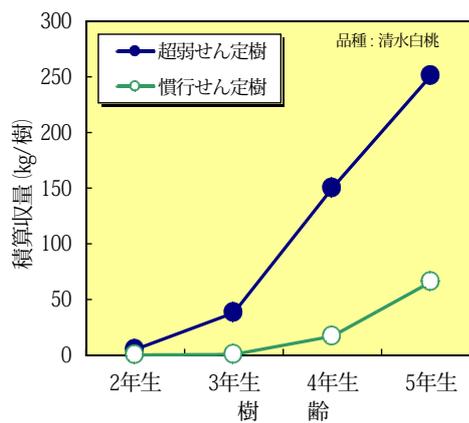


図2 超弱せんだ樹と慣行せんだ樹における積算収量の変化

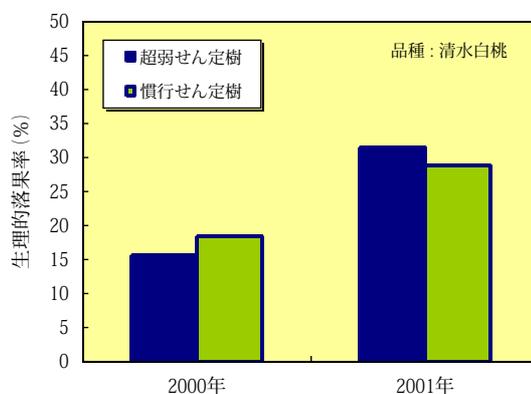


図3 超弱せんだ樹と慣行せんだ樹の生理的落果程度

表1 超弱せんだ樹と慣行せんだ樹の果実重、糖度、核割れ率

	果実重 (g)	糖度 (Brix)	核割れ率 (%)
超弱せんだ樹	297	13.6	40.6
慣行せんだ樹	312	13.1	58.2

注) 品種：清水白桃, 3～5年生の平均

[その他]

試験研究課題・事業名：高糖度モモ生産のための栽培管理指標の策定

予算区分：県単

研究期間：平成13年度

関連情報等：平成10年から瀬戸内農業技術センターにて実証試験中